

**[A年] 降誕節第2主日(2021年1月3日)**

**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 31章15～17節**

15 主はこう言われる。

ラマで声が聞こえる

苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。

ラケルが息子たちのゆえに泣いている。

彼女は慰めを拒む

息子たちはもういないのだから。

16 主はこう言われる。

泣きやむがよい。

目から涙をぬぐいなさい。

あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。

息子たちは敵の国から帰って来る。

17 あなたの未来には希望がある、と主は言われる。

息子たちは自分の国に帰って来る。

**【使徒書日課】**

**コリントの信徒への手紙二1章3～11節**

<sup>3</sup>わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。<sup>4</sup>神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。<sup>5</sup>キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。<sup>6</sup>わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができます。<sup>7</sup>あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。

<sup>8</sup>兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。<sup>9</sup>わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。<sup>10</sup>神は、これほど大きな死の危険からわたしたち

を救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これからも救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。<sup>11</sup>あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。

**【福音書日課】 マタイによる福音書2章13～23節**

<sup>13</sup>占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」<sup>14</sup>ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、<sup>15</sup>ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

<sup>16</sup>さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。<sup>17</sup>こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

18 「ラマで声が聞こえた。

激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、

慰めてもらおうともしない、

子供たちがもういないから。」

<sup>19</sup>ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、<sup>20</sup>言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」<sup>21</sup>そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。<sup>22</sup>しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、<sup>23</sup>ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

## エレミヤ書 31章15～17節

15 主はこう言われる。

ラマで声が聞こえる

激しく嘆き、泣く声が。

ラケルがその子らのゆえに泣き

子らのゆえに慰めを拒んでいる

彼らはもういないのだから。

16 主はこう言われる。

あなたの泣く声を

目の涙を抑えなさい。

あなたの労苦には報いがあるからだ

——主の仰せ。

彼らちは敵の国から帰って来る。

17 あなたの未来には希望がある——主の仰せ。

子らは自分の国に帰って来る。

## コリントの信徒への手紙二 1章3～11節

3私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈み深い父、慰めに満ちた神がほめたたえられますように。4神は、どのような苦難のときにも、私たちを慰めてくださるので、私たちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。5キリストの苦しみが私たちに満ち溢れているように、私たちの受ける慰めもキリストによって満ち溢れているからです。6私たちが苦難に遭うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。また、私たちが慰められるなら、それはあなたがたの慰めのためであり、この慰めは、私たちの苦しみと同じ苦しみに耐える力となるのです。7私たちがあなたがたについて抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、私たちは知っているからです。

8きょうだいたち、私たちがアジアで遭った苦難について、ぜひ知っておいてほしい。私たちは、耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失い、9私たちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。10神は、これほど大きな

死の危険から私たちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これからも救ってくださるに違いないと、私たちは神に望みを置いています。11あなたがたも祈りによって、私たちに協力してください。それは、多くの人びとの祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が私たちのために感謝を献げるようになるためです。

## マタイによる福音書 2章13～23節

13博士たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、幼子とその母を連れて、エジプトに逃げ、私が告げるまで、そこにいなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」14ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ退き、15ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトから私の子呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

16さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、激しく怒った。そして、人を送り、博士たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下の男の子を、一人残らず殺した。17その時、預言者エレミヤを通して言われたことが実現した。

18「ラマで声が聞こえた。

激しく泣き、嘆く声が。

ラケルはその子らのゆえに泣き

慰められることを拒んだ。

子らがもういないのだから。」

19ヘロデが死ぬと、主の天使が、エジプトにいるヨセフに夢で現れて、20言った。「起きて、幼子とその母を連れ、イスラエルの地へ行きなさい。幼子の命を狙っていた人たちは、死んでしまった。」21そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。22しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞き、そこに行くことを恐れた。すると、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方へ退き、23ナザレという町に行き住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現したのである。

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・1月3日「降誕節第2主日」の日課主題は「エジプト逃避」。教会暦に基づく主日聖書日課は、通常、同じ呼称の「主日」には毎年、同じ主題に基づいた日課箇所が充てられているが、教団聖書日課(4年サイクル)の「降誕節第2主日」は、降誕物語の中から年によって異なる主題が取り上げられ主日聖書日課が定められている。「エジプト逃避」はマタイ福音書を軸とするA年の主題で、B年には「幼児イエスの宮詣」、C年には「少年イエスの宮詣」、D年には「受肉したキリスト」を主題としている。

・「イエスの降誕物語」における「エジプト逃避」は、マタイ福音書が、「東方からの学者らによる幼子の礼拝」という逸話伝承と組み合わせられた「ヘロデ大王の幼児虐殺事件」伝承の中で描かれる出来事。旧約聖書には、一時的に避難した人物・集団の物語がさまざまに描かれている。例示すると、アブラハムのエジプト滞在(創世記12章)、ヤコブ一族のエジプト移住(創世記37章以下、特に46章以下)、ソロモン王時代の労務監督官ヤロブアムの亡命(王上11章)、南王国滅亡時のユダの人びとの逃避(エレミヤ43章)などがある。一般的に危機に際して避難し保護を得る場所としてエジプトが設定されていると見ることができるが、そのことが必ずしも主の御心に沿ったものであるとは限らず、むしろ、そこから再び神の約束の地へと帰還すること(出エジプト!)において主の御心が示されていることに焦点が据えられている。

・旧約の物語において、イスラエル共同体にとっての「エジプト」は、単に近隣の大国ということにとどまらず、象徴的な意味合いが強い。アブラハム物語以来、エジプトは、イスラエルの人びとが行って寄留することを避けるべき場所として神が繰り返し注意喚起する対象である。ユダヤ教正典「律法と預言者」が編纂された時代、エジプトはすでに、アッシリアの支配を経てアケメネス朝ペルシアの帝國的支配に入っていた。元来、セム系民族であるユダ・イスラエルの人びとにとっての文化的ルーツはメソポタミア文明にあり、ハム系民族によって建設されたエジプト文明とは異なる。しかし、前2000年以降、セム系民族のエジプト移住が進み一時エジプトにセム系王朝(ヒクソス)が建設されることがある一方で、エジプトの北進・東進侵攻も積極的に行われるようになるなど、二大文明間で大国が覇権を争う時代が訪れていた。「出エジプト」伝承は、このような時代背景の中で起こったこととして物語られている。ところが、前1000年代にはエジプトの覇権的支配が弱まり、両文明の中間地域ではユダ・イスラエルをはじめとする小国・都市国家が自立的な時代を迎える。サウル・ダビデの王国は、このような時代に建設されたが、それはむしろ、エジプトや同じハム系民族であるカナン人(≒フェニキア人)との間に政治的・

経済的な関係を結んでいくことによって実現したであろうことが推察される。実際、ソロモン王はエジプトのファラオの娘を第一王妃として迎えたことが明言されている。この時代、同祖であるメソポタミアではアッシリアとバビロニアが覇権を争い続けており、いずれかの勢力が優位を得れば、ただちに地中海東部沿岸部にまで支配を拡大する軍事行動が取られた。それに対して、ユダ・イスラエルやアラムなどの小国は、それに屈服するか、それともエジプトの後ろ盾を得て対抗するか、選択を迫られることが繰り返されたのである。

**旧約日課(エレミヤ31章より)**

・「エレミヤ書」は、南王国末期にヨシヤ王の政治改革に参画することから預言者活動を始めた預言者の伝承を集めた文書。おもに、南王国がバビロンによって滅亡していく時期に行った預言活動が、本預言書の内容となっている。晩年は、バビロン捕囚を逃れてエジプトに亡命する人々に連行される形でエジプトに行き、その地で最後の預言活動をして没したとされる。  
・日課箇所は、本預言書で「新しい契約締結の予告」が告げられていく預言の前段部。「ラケル」は、ヤコブの妻の一人で、ヨセフとベニヤミンを生んだが、旅の途中にベニヤミンを出産した後、死んだため、「エフラタ、すなわち…ベツレヘムへ向かう道の傍らに葬られた」(創35:19)。その後、ヤコブと息子たちの一族は、ヨセフを先鞭としてエジプトに移住しており、葬られたラケルは一人残された形になった。しかし、ヨセフの遺骨は、出エジプトの際に携えられ、ヨシヤによってカナン定住後、ヨセフ族(エフライム族)の嗣業地シケムで埋葬されたとされている(ヨシヤ24:32)。

**使徒書日課(Ⅱコリント1章より)**

・「コリントの信徒への手紙二」は、使徒パウロがコリント教会に宛てた手紙の一つ。パウロは、コリント教会の人びとの関係をこじらせていたが、この手紙の冒頭で、互いに苦しみを共にすることを通して主の慰めを分かち合う交わりに生きることができると訴えて、相互の和解の基礎となる視座を得ようとしている。

**福音書日課(マタイ2章より)**

・日課箇所は、降誕物語におけるエジプト逃避伝承。マタイ福音書は、主イエスの両親が元々ベツレヘムに居住していたことを前提に主イエスの生誕地を示しているが、ここにヘロデ大王の幼児虐殺事件とエジプト逃避伝承を置くことで、その後両親と幼子がナザレに移住し、そこで主イエスが育てられたものとしている。これらの出来事を物語るために、マタイ福音書は、預言者(ホセア11章、エレミヤ31章)の預言を引用し、エジプト逃避という旧約で繰り返し用いられるモチーフを採用している(モーセ誕生物語や過越伝承、ヤロブアム伝承などとの関連も留意)。主イエスも神のご計画に用いられる器として選ばれていることが、「出エジプト」によって示されているのである。

来週の誕生日 (1月3日～9日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-276 番「あかつきの空の美しい星よ」(= I 346 「たえにうるわしや」)は、宗教改革後の 16 世紀後半ドイツでルター派牧師として活動したフィリップ・ニコライの代表作で、「コラールの女王」とも呼ばれる讚美歌詞。ニコライは、欧州中をペストが襲い、連日 30 件もの葬儀を執り行うという経験をし、ペストが終息した後にこの詞を生んだとされる。この詞には、「天の花婿イエス・キリストについての信仰深い魂の靈的婚礼歌。預言者ダビデの詩編 45 編に基づく」という副題が付けられており、当初は結婚式に用いられたが、後に公現日の讚美歌として定着した。曲は、ストラスブル詩編歌収録の曲を参考にニコライが作ったと考えられている。
- ・21-272 番「おやすみなさい」は、北米ヒスパニックの間で伝わる子守歌に基づく。曲は、クリスマス大衆演劇で歌われていたものから。
- ・21-73 番「主よ、平和のうちに」は、19-20 世紀ドイツの讚美歌学者シュピッタが 16 世紀の宗教詩人 J. エングリッシュの「シメオンの讚歌」に基づく詩を改作した歌詞。曲は、ルターと同時代のドミニコ会修道士オルガニストのダハシュタインの作曲。22 番も作曲。
- ・21-180 番「去らせたまえ」は、前週資料参照。

21-276「あかつきの空の美しい星よ」

*Wie schön leuchtet der Morgenstern*

1. Wie schön leuchtet der Morgenstern / Voll Gnad' und Wahrheit von dem Herrn, / Die süße Wurzel Jesse! / Du Sohn David aus Jakobs Stamm, / Mein König und mein Bräutigam, / Hast mir mein Herz besessen, / Lieblich, freundlich, / Schön und herrlich, groß und ehrlich, / Reich von Gaben, / Hoch und sehr prächtig erhaben!
2. Ei meine Perl', du werte Kron', / Wahr'r Gottes- und Mariensohn, / Ein hochgeborner König! / Mein Herz heißt dich ein Lilium, / Dein süßes Evangelium / Ist lauter Milch und Honig. / Ei mein Blümlein, / Hosianna, himmlisch Manna, / Das wir essen, / Deiner kann ich nicht vergessen!
3. Geuss sehr tief in mein Herz hinein, / Du heller Jaspis und Rubin, / Die Flamme deiner Liebe / Und erfreu' mich, daß ich doch bleib' / An deinem auserwählten Leib / Ein' lebendige Rippe! / Nach dir ist mir, / Gratiosa coeli rosa, / Krank und glimmet / Mein Herz, durch Liebe verwundet.
4. Von Gott kommt mir ein Freudenschein, / Wenn du mit deinen Äugelein / Mich freundlich tust anblicken. / O Herr Jesu, mein trautes Gut, / Dein Wort, dein Geist, dein Leib und Blut / Mich innerlich erquicken! / Nimm mich freundlich / In dein' Arme, daß ich warme / Werd' von Gnaden! / Auf dein Wort komm' ich geladen.
5. Herr Gott Vater, mein starker Held, / Du hast mich ewig vor der Welt / In deinem Sohn geliebet. / Dein Sohn hat mich ihm selbst vertraut, / Er ist mein Schatz, ich bin sein' Braut,

/ Sehr hoch in ihm erfreuet. / Eia, eia, / Himmlisch Leben wird er geben / Mir dort oben! / Ewig soll mein Herz ihn loben.

6. Zwingt die Saiten in Zithara / Und laßt die süße Musika / Ganz freudenreich erschallen, / Daß ich möge mit Jesulein, / Dem wunderschönen Bräut'gam mein, / In steter Liebe wallen! / Singet, springet, / Jubilieret, triumphieret, / Dankt dem Herren! / Groß ist der König der Ehren!
7. Wie bin ich doch so herzlich froh, / Daß mein Schatz ist das A und O. / Der Anfang und das Ende! / Er wird mich doch zu seinem Preis / Aufnehmen in das Paradeis, / Des klopf' ich in die Hände. / Amen! Amen! / Komm, du schöne Freudenkrone, / Bleib nicht lange, / Deiner wart' ich mit Verlangen!

21-272 番「おやすみなさい」

*Duérmete mi niño*

*English translation*

*Oh, Sleep Now, Holy Baby*

1. Oh, sleep now, holy baby, / with your head against my breast: / Meanwhile the pants of my sorrow / are soothed and put to rest.

Refrain:

*A la ru, a la me, / al la ru, a la me, / al la ru, a la me, al la ru, a la me,*

2. You need not fear King Herod, / He will bring no harm to you; / so rest in the arms of your mother / who sings you a la ru.

Refrain

21-73「主よ、平和のうちに」

*Im Frieden dein, o Herre mein*

1. Im Frieden dein, o Herre mein, / lass ziehn mich meine Straßen. / Wie mir dein Mund gegeben kund, / schenkst Gnad du ohne Maßen, / hast mein Gesicht das sel'ge Licht, / den Heiland schauen lassen.
2. Mir armem Gast bereitet hast / das reiche Mahl der Gnaden. / Das Lebensbrot stillt Hungers Not / heilt meiner Seele Schaden. / Ob solchem Gut jauchzt Sinn und Mut mit allen, die geladen.
3. O Herr, verleihe, dass Lieb und Treu / in dir uns all verbinden, / dass Hand und Mund zu jeder Stund / dein Freundlichkeit verkünden, / bis nach der Zeit den Platz bereit' / an deinem Tisch wir finden.

21-180 番「去らせたまえ」

*Nunc Dimittis*

Nunc dimittis servum tuum, / Domine, secundum verbum tuum in pace: / Quia viderunt oculi mei salutare tuum / Quod parasti ante faciem omnium populorum: / Lumen ad revelationem gentium, et gloriam plebis tuae Israel.